

樋口一葉「闇桜」考

— 同時代の「恋」をめぐる言説の中で —

塚 本 章 子

はじめに

「闇桜」(明治三十五年三月「武蔵野」)は、樋口一葉のデビュー作である。しかし長い間、少女趣味の稚拙な初恋物語と見られ、評価は低く、師である半井桃水への一葉の恋を反映したものとして読まれる程度であった。そしてまた、「暗夜」や「大つごもり」といった、作家としての転機を迎えるまでの習作として、他の初期のテクスト群と一括して論じられてしまうことも多い。

しかし、近年少しずつ、このテクストを捉え直すとする論も出て来ている。橋本威氏は、

『伊勢物語』第四十五段に筋の展開を借り乍ら、『伊勢物語』のそれが全く表現しなかった「むすめ」の心理を、この短い中に、かなり精緻に描き出しているのである。つまり、寧ろ「専ら千代の心理描写だけに頼つてゐる。」²⁾ところに、『闇桜』の価値は、

先ず見出せるのである。

と述べている。

また関札子氏は、³⁾

片恋を自覚し、自覚したとたん世界にたいする自分の感じ方がまったく変わってしまうことに驚く者はけっこういるはずである。ひとの声をおもいだすにつけて「身もふるはれ」、ひとを「恋しい」とおもうにつけ、「恥かし」さや「つ、まし」さ、では「恐ろし」さなどの感覚が蘇るといふ経験。一葉のエククリチュールは、いままではすでに死に絶えてしまったかのような、このような感覚のあれこれが、古風な意匠(衣装)のもとに内包され、息づいているのを感じさせてくれるのである。

と述べる。そしてさらに、「この物語で一葉が試みたのは、対なる関係や幻想などではなく、相手とは別個に存在する思いであり、恋する主体としてそれらの思いのつづれおりを織る⁴⁾織りあげてみる

ことであつた。」と指摘している。

どちらも、「恋する主体」としての千代の自意識の葛藤に、捨てきれぬものがあることを見出している。

このテキストが書かれた明治三五年頃には、「恋」や「愛」というものが真正面から語られていた。つまり、江戸時代の「色」から「愛」・「恋愛」へとという転換がなされていく時代だったのである。『女学雑誌』は、近代国家の構成単位として、西欧に恥じない夫婦関係・家庭を作りだそうとし、「色」から「愛」へ、更に「愛」から「ハッピー・ホーム」へとという主張を、継続的に紡ぎ出していた。また、北村透谷の「厭世詩家と女性」（明治三五年二月『女学雑誌』）や、「処女の純潔を論ず」（明治三五年一〇月『女学雑誌』）といった評論は、当時の若者達に強烈な衝撃を与えた。この透谷の一連の「恋愛」観は、その後の多くの作家たちにも大きな影響を及ぼしていくことになる。「閨桜」が書かれたのは、まさにこういった新しい「恋」の形成期だったのである。

「閨桜」の構想そのもの、そして橋本氏も指摘するように、『伊勢物語』第四五段では表現されることのなかった、主人公千代の「恋する主体」としての葛藤する心を書き綴ろうとする試みには、このような同時代の「恋」をめぐる言説との深い結び付きを見出すことが出来るのではないか。そしてその様な観点から見れば、千代の「恋」のありようは、一葉という個人の恋心に還元するだけでは

済まされない問題をも、持っていることになるだろう。

—

山根賢吉氏は、『閨桜（下）』について、「伊勢物語」第四五段や「源氏物語」といった古典文学の影響とともに、「軌を一にする」同時代の小説として、幸田露伴の「対鶺鴒」（明治三三年一〜二月『日本文華』）をあげている。

ここでは良之助に対する片恋ゆえに病臥し、やがて死に至るお千代を描いた（下）の部分についてふれてみたい。この部分も古典文学との関連からすれば、「伊勢物語」（第四五段）や「源氏物語」などを考えることができるが、軌を一にするものを同時代の作品に求めるならば、それは露伴の「対鶺鴒」ではなからうか。「対鶺鴒」の若殿はふと耳にした噂話からお妙を思慕し、その片恋ゆえに病み衰えて死んで行くのである。「閨桜」の良之助が自らに対する恋ゆえに死んで行くお千代を如何ともし難いように、若殿の臨終にかけつけたお妙はなす所を知らず失神する。男女とを異にするとは言え、両者はほぼ同じ道行きをたどっていると言えよう。

興味深い指摘である。確かに「対鶺鴒」は、「閨桜（下）」の形象に大まかな輪郭を与えている。しかし、「閨桜」は「対鶺鴒」にとどまらず、露伴の「恋」に関する思想に、もう一步深く踏み入って

いるように思われる。そして、類似しつつも、異なつた方向性を内在させてもいるのである。

「対偶體」では、お妙に求婚して拒まれた若殿が、「恋」の苦惱から肺病を進行させて死ぬという、「闇桜」と比べると比較的分かりやすい設定がなされている。また、お妙を中心に描かれており、若殿の様子は、お妙のもとを訪れる使者の言葉によつて、遠くから一通りなぞられるにすぎない。

活発に聡明に渡らせ玉ひし若殿御動靜ガラリと変り玉ひ、外出も仕玉はず書見も仕玉はで、花にも月にも嗟嘆の御声ばかり、望みは絶し此世に絶ぬ玉の緒のあるは悲しき事の限りぞ、あるに甲斐なき生命誰が為にかながらへんなどと唧ち玉ひて、次第、に三度の御食す、まず、昼はうとうと眠り玉ひて夜は寝難に輾転玉ふ、

若殿終に浮世をあぢきなく思はれしあまり、うつらくと病ひの床に打臥されて其後御枕上らず、療治の詮方もなく父君母君今は共に最愛の御嫡子に引されて心よわくと描かれていだけである。

ここには、恋心を主体化し、その心の変化をつぶさに辿らうとする言葉はない。若殿の立場を主体化するかのようには、そしてそれをさらに膨らますかのようには、恋する者の心の葛藤を描こうとした

「闇桜」に、このテキストの命といつてもよいものを吹き込んだのは、同じ露伴の「風流悟」（明治二四年八月「国民之友」付録 筆者名は雷音洞主）ではなかつたか。

「風流悟」の冒頭は、次のように述べられている。少々長くなるが、重要だと思われるので引用する。

恋と名のついたりるものは即ち牢獄なるか、我はそれを牢獄なりと敢て断定するにはあらざれど、恋の範囲内に入りしものは皆必らず自由を奪はるれば、恋を牢獄といふも或は当然ならむ。我恋せざりし以前は林の中の鳥の如く海の中の魚の如く行かんと欲するところに行き得し、又草の上の羊の如く沙の上の亀の如く止まり休まんと欲するところ止まり休み得しが、今は全く牢獄の中に投ぜられして同じく、我が労働すべき地に行かむと欲するも行くことを得ざるなり、我が静かに眠らむとする適当なる地に止まることをも得ざるなり。彼女は我が随意に運動せむとするを制する獄丁なり、彼女は我が快く憩はむとするを叱咤し追ひ立る惨忍なる獄丁なり。而して我普通の牢獄にあらばその獄丁を充分恨むことを得て、幾分か尚ほ毒の満ちたる一腕に胸中の気を吐くことをせめてもの腹癒せとせんなれど、恨み慣るといふ自由さへも恋の牢獄にては奪はれたるなり。（略）我が魂魄は実には他の一端は彼女の手中にあるところの鉄鎖にながれ、狗の如く牽かれつゝあるなり、我が心には彼女の名の

刻まれたる石の枷のかゝり居るなり。(略) 悲夫、今は断ち除くことの力をも奪はれたるなり、断ち除かんと願ふ意志の自由さへ亡びたるまで衰弱したるなり。(略) 嗚呼、我が我といふものは竟に此牢獄内に復び無邪気の晴天、光明正大の白日を見ることが無くして死すべきか涙おべきか、(傍線・塚本)

ここには、形の上では「対髑髏」の若殿の姿とも重なりはするが、しかし、より主体的な視点から、恋する者の心の悶えが表現されている。恨もうとして恨めず、断とうとして断てぬ苦しさも付け加えられている。

「闇桜」の(上)においては、快活であどけなかつた千代もまた、兄のように思っていた良之助に対する想いが、「恋」に変わった時から一変して、まるで良之助に取り付かれたようになる。(中)では、千代の心は、「かく云はゞ笑はれんかく振舞はゞ厭はれんと仮初の返答さへはかくしくは云ひも得せず」、「胸のあたりの燃ゆべく覚えて夜はすがらに眠られず思に疲れてとろく」とすれば夢にも見ゆる其人の面影、「昼は手ずさびの針仕事にみだれその乱る、心縫ひとめて」と、片時もなく激しく乱れ続ける。幾度か「いさぎよく断念め」ようとしながらも、やはり「思案のより糸あとに戻りぬ」と、諦められない。「其のおやさしきが恨みぞかし(略) 忘れぬは我身の罪か人の咎か思へば憎きは君様なり」と、良之助が恨めしくもなり、「今日よりはお目にもかゝらじものいはいはお気に

障らばそれが本望ぞ」と思ひもするのにな、「隣の声を其の人と聞けば決心ゆらくとして(略) 逢ひたしの心一途に」なってしまう。そうして煩悶するうちに、(下)に至って、千代は瘦せ衰えて、死んでゆくのである。

「闇桜」の全体の構成は、「恋」に墮ちる以前の気楽な状態から、「恋」に目覚めると一変して鬱々となり、寝ても覚めても相手への想いに取り付かれ、恨もうとしても恨めず、やがて死ぬほどまでに衰弱していくというもので、それは「風流悟」の冒頭部分を忠実にたどっている感がある。

さらに、「風流悟」の「我」の「恋」は、「彼女」と互いの気持ちを知り合って、愛し合っているというものではない。「彼女が我を愛せしことは他の意味あるにあらざるして、全く乞食を愛し盲者を愛し、罪に壊れたる道路を繕ひつゝ、ある囚人を愛することとき有様に我を愛せしのみなればなり」とあるように、「我」は、「彼女」が自分を異性として「愛」しているのではないことを感じている。そしてまた、

我はいまだ片言隻語も彼女に対して我が恋をほのめかすことを得ざりし。実に彼女に向つて其の面をさへ尚ほ能く見るあたはざりし我が、如何にしてか胸中の真情を吐露することを得んや。されば彼女は我が恋に沈めることを或は知らざるならむ、是れ彼女に在つては至当の事なり、我に在つては幸福ならざるこ

とか。云はんか語らんか、我は卿を恋へりといふことを云ひ出さんか。(略) 彼女が果して如何なる語をもつて如何なる情をもつて我を待つべきか、是れ素より知る能はざるところなり。とあるように、「我」の「恋」は、「彼女」の自分に対する「恋」を確認できぬ、一方的な片恋としてあり、打ち明けることができないという苦しみを伴って描かれている。

「閨桜」においても、千代の「恋」は片恋である。千代と良之助の互いの感情は大きくずれている。良之助は、「愛らしと思ふ外一点のごりなければ我恋ふ人世にありとも知らず」とあるように、千代に対して異性としての「恋」の感情はまだ持っていない。そして千代にも、「妹と思せばこそ隔てもなく愛し給ふなれ」と、それは分かつているのである。そしてそれ故に、千代も、夢に見るほど、良之助に自分の思いを打ち明けたという気持ちと、打ち明けられないという気持ちの間で激しく揺れている。

夢にも見ゆる其人の面影優しき手に背を撫でつ、何を思ひ給ふぞとさしのぞかれ君様ゆゑと口元まで現の折の心ならひにいひも出でずしてうつむけば隠し給ふは隔てがまし大方は見えて知りぬ誰れゆゑの恋ぞうら山しと憎や知らず顔のかこち言余の人恋ふるほどならば思ひに身の瘦せもせじ御覧せよとさし出す手を軽く押へてにこやかにさらば誰をと問はる、に答へんとすれば暁の鐘枕にひびきて覚むる外なき思ひ寝の夢鳥がねつらきは

きぬぐの空のみかは惜しかりし名残に心地常ならず
思ひはこのように、描かれている。

もう一つ呼応する点をあげてみよう。「風流悟」の「我」の「恋」は、「位階、爵禄、門閥、容貌、言語、衣服、金銭等」といったものによって構成されている。「夢の化石世界」においては、「世界全体」に阻まれて、決して成就することはないとされる。

不成就が果して不幸にして成就が果して幸福なるものならば我は不幸の恋に沈めるものなり、如何となれば我は夢の化石世界に於ての最劣者、彼女は最勝者にして、夢の化石と化石とが積み立ち組み織りて成れる此世界の一端に彼女の立ち、他の一端に我が立つ間は、一端より他の一端に到るだけの間即ち此世界全体が我と彼女とを隔離して、我と彼女との間の障礙物として成り立てばなり。

対して、「閨桜」の千代も、良之助との断絶を感じている。「終のよるべと定めんにいかなる人とか望み給ふらんそは又道理なり君様が妻と呼ばれん人姿は天が下の美を尽して糸竹文芸備はりたるをこそならべて見たしと我すら思ふに御自身は尚なるべし及ぶまじきこと打出して」と、千代の前に立ちはだかるのは、良之助が出世して立派になっていくことである。(上)で、千代は、良之助が「学校を卒業なされて何といふお役か知らず高帽子立派に黒ぬりの馬車にのりて西洋館へ入り給ふ所を」夢に見たと話している。将

来立派に出世し、高級官僚として上り詰めていくと思われる良之助に、自分が相応しい女性ではないという劣等感を千代は持っているのである。だがこの思いは、一見すると、余りにも唐突な劣等感として我々には感じられてしまう。千代のこの劣等感の背景には何があったのか、それについては次節で詳しく論じてみたい。ただ、ここでは、「風流悟」と呼応するように、千代もまた、自分と良之助の間に出来ていくであろう社会的階層の違いに、「恋」の成就を阻むものを予感しているということを確認しておきたい。

以上のように、「閨桜」は「風流悟」から多くのものを受け取っている。ただし「閨桜」は、「風流悟」の主張の全てを受け入れているわけではない。二つのテキストの異なる点についても、後に触れてみることにする。

二

では先に触れたように、なぜ千代が過剰なほどに、良之助の妻になることを「及ぶまじきこと」と感じるのか、少し考えてみたい。隣同士に暮らし、仲の良い両家に、それ程の「門地」や「門閥」などの違いがあるとは考えにくい。すでに指摘があるように、確かに千代は中村家の一人娘であり、良之助はすでに園田家を相続しており、元々結婚は不可能だと考えることも出来る。だが、そのことは意外にも千代の意識にはのぼっていないように見える。彼女の心が

陥っていくのは、先にも述べたように、将来の良之助に自分が釣り合わないという思いなのである。

婁庭篁村の『小説むら竹』は、日記によって一葉が読んだことが確認できるテキストである。その第一巻（明治三二年七月）所収の「窓の月」が、「閨桜」に影響を与えていることは、すでにしばしば指摘されている。¹⁰「窓の月」は、菓子屋の娘お仲と、その隣の眼鏡屋の息子梅二郎という幼なじみの男女の婚姻をめぐる物語である。「閨桜」と一致する点をあげれば、隣同士で幼なじみの男女であること、男が出世の途上にあること、また年齢設定も、女が一六歳、男が二二歳で同じであることである。

さらに、「窓の月」第五回には、お濱とお峯という二人の娘が、「次から束髪になる積りですよ」などとべちゃくちや喋りながら、梅二郎の嫁にはお仲が決まったと噂するところにお仲がでくわし、冷やかされる場面がある。この箇所は、「閨桜」の千代が良之助と一緒に歩いているところを、「束髪の一群」に「おむつまじいこと」と「無遠慮に」冷やかされる場面と呼応する。だが、「窓の月」は次のように描かれていく。

梅二郎は、「英学を修め」た若者で、「往々は国会議員となり馬車で国会議事堂へ出かけやうといふ下心」を持っている。梅二郎の両親は彼に、彼を心から愛しており、気心も知れた優しい隣家のお仲との婚姻を薦める。だが、梅二郎は新聞広告を出して募集すると言

う。あくまでもお仲を薦める父親に、梅二郎は「彼はいけません」と言い放つ。彼は、「彼れで学問さへ出来れば私は向ふが否だといつても貰ひたうございます夫にまだお仲さんは小児のやうですから、」と、その「一番肝要」だという理由を明らかにする。結局、話は、お仲を二三年学校へ通させた後に、この縁を整えるということに落ち着く。そして結末は、「駿河台辺の在る女学校へ入校させしが張り合ひあるため進み早く教師も舌を捲くほどなれば梅二郎も満足し以前に増して愛々しく折々は知らぬ所を教へたまむづかしき事などもいと睦く語り合ふに双方の親達も笑みつ、日をは送るといふ」と書かれている。

梅二郎とお仲を隔てるものは、お仲の「学問」の有無なのである。「窓の月」では、お仲が女学校へ行くことで容易に解決しているが、男性が「知らぬ所を教え」、「むづかしき事などもいと睦く語り合ふ」という関係を、梅二郎は求めている。

「学問」によつて立身出世を遂げた男性たちは、相応に「学問」があり、対等に話が出来ような女性を望むようになる。この時代のテクストには、そんな男性たちがしばしば登場する。坪内逍遙の「可憐嬢」（明治二〇年二月）も、その一つである。

主人公のお民は、幼少の折りに定められた新作の許嫁であったが、家の零落と両親の死によつて、不遇な境遇にあつた。偶然にも、新作はお民と出合い、深い仲になつてしまふ。お民は新作の家に引き

取られ、新作が洋行から帰るまでの間、読み書きや言葉遣い、行儀などを、新作の母に仕込まれることになる。実はお民を厭いはじめていたために、アメリカからイギリスへ渡つて帰国を延ばしていた新作は、ようやく帰国するが、「あのお民ハ只今より断然離縁したく思ひますから」と母に告げる。その理由とは、

実は私も欧州へ参て色々経験を致しますにつけて彼地の風俗を観るにつけてア、真正の夫婦といふものは是非とも斯なくてハ叶はない訳だ夫に八分の学識があれば妻にも尠くとも六七分位ハ兎に角相応した学問がなくてハ……互に相助け相慰め又ハ上等の交際をしたとて夫を毀けない位までにハ妻にも教育がなくてハならぬト段々経験か重ります毎にア、不所存な事をした実に我ながら若氣とハいへど未来の幸福を種なしにした昔の過失が残念で堪らず

というものであつた。だが結局は、母が、お民がどんなに孝行な娘かを涙ながらに訴え、新作も後悔して、二人は元のさやに収まるといふ幕切れである。ここでも、二人の「恋」は、女性の「学問」の有無によつて、一旦阻まれている。

『女学雑誌』は、彼ら知識人男性の、そのような要求を生み出していく母体でもあつた。例えば巖本善治の「理想之佳人」（明治二一年四月）五月『女学雑誌』では、男性が「文明国民」として、「理想」の女性像をいざくことが推奨されている。

諸君が、先祖伝来の理想を放擲して、更に開化したる一新の理想を立てられるべきの時にあらずや。(略) 諸君もし真に極美の佳人を理想せば、極美の佳人、豈に天の一方より降生することなからんや。

その「佳人」像を、筆者は次のように記すのである。

吾人が最も愛慕する所の佳人なるものは、先づ吾人をして之を愛すると同じに、亦た之を敬せしむるを得るの資格あらざる可らず。然れども、必ずしも沈魚落雁閉月羞花の好顔あることを要せず。但だ其頭腦の甚ハだ確かなると共に、其の心情の甚ハだ優美なるもの、其の識見の甚だ遠大なると共に、其の用意の甚だ綿密なるものありて、而して其品徳は清潔潔白、其風采は優雅温和ならんことを望む。左ればも仮令ひ舞踏は上手にあらざるとも、音楽も亦た左程に堪能ならざるとも、先づ上帝を信じ、真理を喜び、愛情に富み、自尊の精神に厚く、而して楚々人を動かすの優美なる態度を以て、内に有為快活なる、忍強不撓の勇氣を含み居らんことを希がふもの也。

「閨桜」と比較的近い時期でも、この基本ラインは変わっていない。桜井精作の「婚姻箴」(明治二十四年三月『女学雑誌』二二五号)では次のように書かれている。

愛の真相は生理的の作用にあらず、又憐憫の義侠心にあらず、実に心霊と心霊、パアソンとパアソンとの微笑の握手なり、何

ぞ他に要むるを俟たん、されど人間もこれ社会的の動物なり、さては学識、趣味、理想等の一致を要するなり、一致とは対等の意にあらず、只感知し通達し得るの謂なり、換言すれば理想にも学識にも趣味にも双方の間に相知らんことなり、相通せんことなり、ア、靈肉両界の知己、これ円満なる対等の愛の謂なり。

「閨桜」の千代は、その様な新しい「学問」を身に付けた女性には、どうしても見えないのである。確かに、「束髪の一群」にからかわれた千代に向かって、良之助は「彼は何だ、学校の御朋友か」と言っている。だが、千代自身は「束髪」ではなく、「高島田」に結っている。また、「今の世の教育うけた身に似合しからぬ詞も、」(傍線・塚本)と語られてもいる。千代は、女学校に通い始めた後の「窓の月」のお仲や、「可憐嬢」に顔を出す、女学校に通う瀧口長子や、例えば「浮雲」のお勢などに比べると、余りにも純朴で幼い。そして女学校に通う彼女らの周りに漂いがちな「学問」の匂い、あるいは「英語」の匂いが、千代からは全く感じ取れないのである。その反対に、千代はものを縫う女として描かれている。「恋」に目覚めた後は、ただただ「昼は手ずさびの針仕事にみだれその乱る、心縫ひとゞめ」るばかりである。千代を語る言葉も、「思案のより糸あとに戻りぬ」、「膝につきつめし曲尺ゆるめると共に隣の声を其の人と聞けば決心ゆらく」として、千代が縫う女であるこ

とを強調しているのである。

一体、良之助の言う「学校」とは、何を意味するのだろうか。「窓の月」のお仲が通い始めたという駿河台の女学校1のような、当時の中心的存在であったミッシン系の高等女学校とは思えない。まだごく少数だったこのような本式の女学校ではなく、案外、当時比較的多かった私立の手芸学校2程度のものであった可能性も捨てきれない。良之助がやがて抱くであろう「理想之佳人」を、「姿は天が下の美を尽して糸竹文芸備はりたるをこそ」としかイメージできないことが何よりも、そのギャップを表している。いずれにせよ、千代が、時代の最先端を行く華やかな女学生たちから、一步遅れた女性であったことは確かであろう。

千代は、良之助の出世を夢見て彼を崇拜すれば崇拜するほど、逆に自分が妻としては、相応しくなくなっていくという矛盾に引き裂かれていく。その意識の背後には、互いに尊敬し合い、相談相手になる「学識」のある女性、つまり「理想之佳人」を求め、「自由な恋愛」を夢見る、知識人男性たちの描く「理想」が、渦巻いていたのである。

「風流悟」は、「位階、爵祿、門閥、容貌、言語、衣服、金銭等」といったものに、純粹な「恋」を妨げるものを見出していた。だが「閨校」が、千代という女性を主体としたとき、純粹な「恋」を阻むものとして彼女を脅かしているのは、皮肉にも、新しい「愛」が

語られると同時に語られていった、対等に話し合える「学識」ある新しい女性を求めようとする、知識人男性たちの「理想」なのである。

三

「風流悟」は、発表後かなりの反響を呼んでいたようである。

巖本善治も、「女学雜誌」二七九号（明治二四年八月）の「批評」で、次のように取り上げている。

風流佛、風流魔にまさりて一段高等の觀念に溢れたるは、風流悟なり。（略）真の恋ひせざる人は、真の人情を談じがたじ、而して真の恋とは、言ふ迄もなく、成就を無理に必要するものにあらず、此辺無限の趣むき、今日洞主が優しき雷音によりてや、紙上に響き残れり。

「嗚呼斯の如くにして我は恨を忘れたり、愉快を覚えたり、深き恋慕に入りしを心づきて楽しめり」「而して我は僻みたる性を稍々和らげられし、我は未曾有の歡喜を得たりし、而して我は我が周囲の事物に従前の如く鋭くあたらざるやうなりし」云々。此辺段々靈變の趣むき、嘗て親から経験したるものにあらずば、味はいを尽すこと難し。

色情ではなく、靈の一体化による新しい「愛」を主張し続けてきた巖本善治は、「風流悟」を高く評価し、その片恋のありようを

「真の恋」と呼んでいる。「風流悟」を模倣した「闇桜」が描く、市井に暮らす普通の少女千代の片恋もまた、そのような潮流の中から生まれてきたものといつてよい。

だが嚴本善治は、「風流悟」に描かれた「恋」の「恨み」や苦しみそのものよりも、そこから「愉快」や「歓喜」といった「悟り」へと変化していく結末部分に注目している。確かにそれは、露伴の「風流悟」の特徴ではある。

一方「闇桜」は、「風流悟」のそのような部分は何も取り入れていない。「闇桜」の最後の一文は、「風もなき軒端の桜ほろ／＼とこぼれて夕やみの空鐘の音かなし」と、千代の死を暗示して終わっている。表題「闇桜」につながるこの一文は、表立っては何一つ起こらぬまま、相手もそれを知らぬままに、一人心の内で悶え、くずれるように死へと吸い寄せられていった千代の心の「闇」の表現である。そして、それを救い得るものを、「闇桜」は何も描かなかったのである。

さらに「闇桜」は、そこに独自の視点を加えていく。それは、「其心今少し早く知らば斯くまでには衰へさせしをと我罪恐ろしく打まもれば。」とあるように、千代の恋心に全く気付かなかったことを、そしてさらに言えば、無意識のうちに、命を縮めるところまで千代を追い込んでしまったことを、良之助が自分の「罪」として「恐ろしく」感じている事である。「闇桜」の「闇」とはまた、良之

助が感じねばならぬ自らの存在の「闇」でもある。

「闇桜」に描かれる「恋」は、西欧国家をモデルとして、自然に出会い、互いに尊敬し合う男女の「愛」を説き、それを夫婦関係・家庭へと回収させていく、「女学雑誌」が描くような「恋」ではない。また、「風流悟」のように、「恋」の「恨み」が、「愉快」へと変化していくような「恋」でもない。相手に伝える言葉を持たぬまま、意識を増殖させ、混乱させ、救いのないまま死へと引きずり込んでいく、「恋」する心の不条理なありようである。そして、不器用にすれ違ってしまふ関係や、全く無意識のうちに「罪」を犯してしまっていることの恐ろしさが見出されているのである。

「闇桜」の発表から約三か月後には、北村透谷の「我牢獄」（明治二年六月「女学雑誌」三二〇号）が発表される。それもまた、「風流悟」を強く意識して書かれたものであった。

雷音洞主の風流は愛恋を以て牢獄を造り、己れ是に入りて然る後に是を出でたり、然れども我が不風流は、牢獄の中に捕繋せられて、然る後に恋愛の為に苦しむ、我が牢獄は我を殺す為に設けられたり、我も亦た我牢獄にありて死することを憂ひとはせざれども、我をして死す能はざらしむるもの、即ち恋愛なり、而して彼は我を生かしむることをもせず、空しく我をして彼のデンマルクの狂公子の如く、我母が我を生まざりしならばと打ち啣たしむるのみ。

「我牢獄」で言う「牢獄」とは、「風流悟」の「牢獄」とは異なつて、「名譽」「權勢」「富貴」「榮達」などを獄吏とする、いわば生活世界である。そして「恋愛」は、相手の「魂」を求め、「我が靈魂の半塊を牢獄の外に」漂わせるものとなつてゐる。「風流悟」が「解脱」という形で持つてゐた精神的な高さは、ここで「恋」そのものの持つ高さとして転換されてゐるのである。冒頭でも述べたように、この透谷の「恋愛」觀は、同時代にも後世にも大きな影響を及ぼしていくことになる。

「闇桜」が影響を受けた「風流悟」は、このように大きな反響を呼び、新しい「恋」の形成に一つの重要な役割を担つたテキストであつた。

「闇桜」は、「風流悟」をはじめ、新しい「恋」が語り出されていく時代の空気を呼吸するなかで生み出されてゐる。だがそのなかで、「闇桜」は、「女学雑誌」や露伴や透谷の主張するものとは異なる一葉の「恋」の独自の位相を示し始めてもゐるのである。

注

- (1) 橋本威「闇桜」(「樋口一葉著作研究」一九九〇・一 泉風書院)
- (2) 笹淵友一氏の指摘(「文学界」とその時代 下)「第一節樋口一葉」一九六〇・三 明治書院)
- (3) 四札子「縫ひとぐめ」る心「闇桜」(「語る女たちの時代 一葉と明治女性表現」一九九七・四 新曜社)

(4) 佐伯順子「色」と「愛」の比較文化史(一九九八・一 岩波書店)

(5) 「婦人の地位」(上) (下) (「女学雑誌」第二十五号 明治一八年八月九月) では、(上)で、男女の關係にも進歩の段階があるとして、「第二に色の時代第二に痴の時代第三に愛の時代」と分割し、「愛とハ則ち真正の靈魂より発するものと知るべし」と定義される。そして(下)において、「一家ハ平和に治まり家内ハ親睦に交ハりて此世に在らん限り「ハッピー・ホーム」(幸なる家族)を得て楽み極まりなるべき也」と述べられていく。この論議は、「女学雑誌」の基本的な主張の一つとも言え、こういう論調は明治一五年頃でも持続されてゐる。

(6) 山根賢吉「二葉初期小説覚え書(一)「闇桜」「たま櫻」をめぐつて」(「学大国文」二二号 一九六八・一二)

(7) 一葉が「風流悟」、あるいは掲載されている「国民之友」を読んだという記録はない。しかし、よく指摘されるように、「よもきふにづ記」の明治二六年三月二日には、初めて一葉宅を訪れた平田禿木に「今の世の作家のうち幸田ぬしこそいと嬉しき人なれ」と語つたことが記されている。穴澤清次郎は「紅葉をあまり認めず、露伴を高く買つてゐたやうです」(「一葉さん」「葉全集」付録月報第二号 一九五三・九 筑摩書房)と語つてゐる。また、一葉の日記「随感録二」(表書に明治二五年八月と記載)の四段目冒頭の「恋とは我心に咲き出し花の「おのづから」うるはしくたのしく清らげきものなるを」という表現は、「風流悟」の「我が心の寄せ樹にも元來聞くべくありし愛の花の咲き出でたるなる歎」という表現に一致する。

(8) 溝谷マールガレット氏は、「狂気」と青春不在「闇桜」を中心に(「国文学」第三九卷一 号 一九九四・一〇)で、千代は「一粒のもの」であり、家を継ぐために養子を迎えなければならぬ立場にもかかわらず、結婚が許されない相手を愛した」と指摘する。

(9) 日記「わか草」(明治四年八月一日)に、「前嶋君より小説本(むら竹及浜吉小史)十二冊借る」とある。

(10) 藤井公明「二葉小説の文章」(二葉全集)第七卷所収 一九五六・六筑摩書房、山根賢吉「蘭語論文、滝藤瀧義」二葉初期小説論(一)「間松から『暁月夜』まで」(二葉文学 生成と展開)一九九八・二 明治書院等。

(11) 「女学雑誌」では、第二五二号(明治四年二月)にも見られるように、「東髪とても只今の儘にてはなく、幾分か工夫して、追々に其恰好能やうにしなば、軽便と衛生の点とに於て、是迄の日本風の結髪に勝のみならず、美術上よりいふも旧来の結髪に、見劣りせぬようになるべし、(略)今後依然として東髪行はれたらんには漸次に、其美を煥発すべし」とあり、東髪を擁護する立場を維持している。

(12) 中山清美氏は、「女学生作家の登場―『敷の巻』『婦女の鑑』、巖本善治の小説を中心にして―」(名古屋近代文学研究 第一六号 一九九八・一二)で、田辺花圃「敷の巻」(明治二年六月)、木村曙「婦女の鑑」(明治三年一月・二月)、二葉亭四迷の「浮雲」(明治二〇年六月)、中島湘煙「山間の名花」(明治三年二月・五月)などを取り上げ、「女学生といえは、英語と毛糸編みのみが達者なものである」というイメージは広く行き渡っていたようである。」と述べている。

(13) 駿河台袋町にあった駿台英和女学校をさすとと思われる。

(14) 櫻井役氏の「女子教育史 教育名著叢書⑨」(一九八一・九 日本図書センター) 初版は一九四三・二)によれば、明治四年には各種学校総数は一七〇〇校を算し、生徒は八五八〇六人(内女子生徒一六二二七)を数えている。明治九年の手芸学校の学校数及び生徒数は、公立二校(二六九人)、私立二二八校(三三三二人)、明治二〇年の生徒数は、公立一九四人、私立四四〇五人を数えている。高等女学校数は明治二〇年で

官公立七校、私立二一校で、生徒数は三三六〇人、明治二四年には官公立八校、私立二二校、生徒数一七六九人である。

(15) (7)にも掲げた二葉の「随感録二」の二段目には、「人々を恋うそもくなんの所謂ぞや、あだなる姿うつくしき声ねなどに思ひしむる浅はかさはおきて、学才芸能にまよへる心いと拙し」と書かれてもいる。

——つかもと・あきこ、本学大学院博士課程後期在学——